

国学院大栢木短大

栗原澄子

目的 江戸時代の染織類にはどのような種類のものがあったか、それらの形態や縫製がどのようなであったかをしらべる。

方法 静岡浅間神社に保管されている御神服60点のうち、『御神服調書』名では「御裳」と称されている遺品17腰を対象にした実態調査である。

結果 製作年代は『駿陽歴代記』・『駿國雜誌』によれば寛永18~19年、いずれも三代将軍家光が新宮(浅間神社)・総社(神部神社)・奈古屋社(大歳御祖神社)・山宮(麓山神社)へ奉納したものである。遺品17腰のうち、8腰は単で裂地は紫生絹、胡粉で描き絵がされているものである。他の9腰は袷で、このうち4腰は表裂は錦で、裏裂は生絹と平絹が使用されている。残りの5腰は表裂は浮織物で、裏裂は平絹である。17腰の形態は、いずれも=幅に領の付いている裳で、従来からの女房装束に用いられる八幅の裳や、續裳とも形態の異った裳である。8腰の単の裳のうち7腰は、先に報告した『御神服調書』名では「唐衣」と呼ばれている遺品と上下となり、2と組になるものではないかと考えられる。